

薬物のVLDL/LDLへの分布しやすさが 薬物動態および薬効に及ぼす影響の解析

東京大学医学部附属病院 薬剤部（受賞当時）

伊藤紗代

Sayo Ito

この度は、このような名誉ある賞を賜り、誠に光栄です。心より御礼申し上げます。今回は、エッセイということで、私自身の博士課程を振り返りながら、これを読んでくださった方が、少しでも研究活動に興味や親しみを持ってくださいとか、なんだか勇気が湧いてきた！と感じて頂けたら嬉しいな、という思いで執筆致しました。

【病院薬剤師時代からの思い】

私は2013年に東京大学薬学部の薬学科を卒業しました。当時は、薬学部の6年制制度が始まったばかり！（私は6年制2期生でした。）6年制卒の薬剤師が社会から求められる役割について、もちろん様々なことが謳われていたものとは思いますが、少なくとも、私のなかでは、もやもやと模索中でした。その答えを見つけるためにも、若いうちは医療の現場で、薬剤師として働きたいと考えていました。

実際に、学部卒業後は、東京大学医学部附属病院の薬剤部で研修生となり、研修終了後も同薬剤部で病院薬剤師として5年間勤務しました。配属されたのは主に、薬品情報室と外科病棟でしたが、患者さんや他職種との関わりのなかで、私は、薬物間相互作用や副作用のマネジメントに、薬剤師としての職能・やりがいを感じるようになっていきました。その一方で、臨床背景により複雑化された薬物間相互作用や副作用を適切にマネジメン

トするためには、そのメカニズムの同定や新規メカニズムの発見が不可欠であるという思いを強くしていきました。今回、光栄にも postdoctoral award を頂いた私の博士論文は、薬物の VLDL/LDL への分布しやすさに着目することで、新規薬物間相互作用・副作用メカニズムの解明を試みるものですが、振り返ってみれば、この研究には、私が病院薬剤師時代から抱いていた思いが、しっかりと反映されていたようです。

【研究に没頭できた大学院生活】

5年間の病院勤務の後、私は、病院を一旦辞職し、薬学課程博士の学生として大学院（薬剤部試験研究室）に進学するという決断をしました。これだけでも、私にとっては十分大きな環境変化だったのですが、この時期、偶然、プライベートでも、妊娠・出産という大きなイベントがありました。夏の大学院入試の日は出産予定日の2週間前で、大学院入学式の日には子供が生後7か月、という具合でしたが、周りの方々のご理解・ご協力に支えて頂きながら、無事に大学院生活をスタートさせることができました。

大学院生活では、朝保育園に子供を預けて、夕方のお迎えまで、自分の時間をたっぷりと研究に充てることができました。私は、学部時代は薬剤部試験研究室とは異なる研究室に所属していたため、大学院で初めて、培養細胞を用いた実験や動

物実験の手法を学びました。もともと、新しいことにチャレンジすることにあまり障壁を感じない、というか、興味があれば興味が勝ってしまう性格のお蔭で、初めての実験をマスターすることや実験系を確立していくことは、とても楽しかったです。時には、子供が寝たあと、深夜に研究室に実験をしに行くなど、体力的にハードな面もありましたが、冬には、東大キャンパス内からもオリオン座が綺麗に見えて、空を見上げながら帰路についていることをよく覚えています。

このように、実験自体も好きだったのですが、やはり、得られたデータをもとに次のストラテジーを立てるとか、目的を見失っていないか見直すとか、必要とあれば仮説を修正するなどの「考える」時間が、一番夢中になれて、他の何にも代えがたい研究の醍醐味なのかなと、当時も今も感じています。

【大学院時代、研究以外の、でも大切な収穫】

博士課程では、自分の研究に直接関わる分野の勉強以外にも、趣味として、心理学の分野の本をいくつか読みました。また、研究室内でも研究室外でも、多くの方に、人生相談に乗って頂きました。このようにして、自分以外の考え方に触れることで、困難にどうやって向き合っていくのか、あるいは、どうやってかわしていくのかを学ぶことができました。今のところは、「辛いときほど、自分の力を信じて、自分を安心させてあげる」ことが大切かなと考えています。

また、少し話は変わりますが、私はこれまで運よく、自分の子供を学内の保育園（0-2歳）、夕方まで延長保育のある幼稚園（3-5歳）、学童保育（6歳-）に受け入れて頂くことができ、朝から夕方まで落ち着いて就学や就労を行うことができています。しかし、皆さんご存知のように、待機児童の問題は今なお継続しており、私にとっての博士課程は、このような社会の課題についても考えさせられる機会でもありました。

そして最後に、研究室で若い学生さん達と沢山お話してきたのも大切な思い出です（私は社会人経験後の入学だったため、研究室には干支が一周するくらい歳下の学生さんもいました!）。研究室に配属された学生が、研究生活でどのような悩みを抱えているかを同じ学生としての立場で話し合えた経験は、これから、良き教員になるための糧にしていきたいと思っています。

【謝辞】

本研究の遂行にあたり、直接のご指導を賜りました東京大学医学部附属病院の高田龍平教授、山梨義英講師に、改めまして深く御礼申し上げます。また、ご退官後もメンターとして引き続きサポート頂きました鈴木洋史名誉教授にも、厚く感謝致します。その他、研究室の皆様、家族・友人の皆様のお蔭で、博士号取得と今回の荣誉ある受賞の機会を賜りました、本当にありがとうございました。